

「不寛容社会」に思う



脚本家

浅野妙子

あさの たえこ

最近、世の中がどんどん窮屈になってきた。有名人のちょっとした失敗をあげつらい、手厳しく攻撃する。テレビ局や制作サイドも、批判されたタレントや俳優を出入り禁止にして、萎縮する。

これは、脚本家である私にとっても頭の痛い現象だ。作品にかかわった多くの人の努力の結晶が、誰か一人の不祥事のせいでおじゃんになる。こんなに悲しく腹立たしいことはない。なかには、局側の過剰反応としか思えないケースもあり、それによって作品の質が落ちてしまうとしたら、創作家の端くれとして、本当に残念である。

インターネットを通しての、他者への匿名の攻撃は、今、勢いを増すばかりである。不倫した芸能人は、中世の魔女狩りのごとく火あぶりにされる。昨年、土曜ドラマ『デジタル・タトゥー』でも描いたが、ネットの世界には、正義の皮をかぶって他人を非難するのが大好きな人たちがいる。人の悪口を言うのは楽しい。楽しいから言う。ネット社会は、そんな人間の卑しい欲望に力を与えてしまった。他人をたたく声ばかりが大きくなって、失敗を許し、墜ちた者に寛大であろうとする意見は無視されるか、逆にたたき返される。それが怖

くてものが言えない。いじめっ子が幅を利かせ、常識的で中庸な人間がいじめ返される恐怖に口をつぐむ、まさに教室のいじめと同じ構造が起きている。

私としては、これは過渡的な状況なのだと思います。人類がネットを使い始めてまだ日が浅い。あちこちに飛び交う匿名の声が、今は世界中でハウリングを起こしている状況だ。聞くに値する声も、値しない声も、混じり合って聞こえてくる。何が妥当な意見で、何がそうではないのか、自分で判断する冷静さが、これからは問われていくだろう。ことに情報を発信する側の人間、テレビドラマの制作者には、その資質が問われる。クレマーマがいの意見や圧力に屈すること無く、本当に良いもの、面白いものを自信を持って発信していく。そんな勇氣を持ちたいと思っている。

1961年生まれ。慶應義塾大学文学部仏文科卒業。代表作は、『ラブリエーション』（97年CX）、『神様、もう少しだけ』（98年CX）、『大奥』（2003～05年CX）、『純情きらり』（06年NHK）、『ラスト・フレンズ』（08年CX）、『八日目の蝉』（10年NHK）、『ごめん、愛してる』（17年TBS）、『黄昏流星群』（18年CX）、『デジタル・タトゥー』（19年NHK）。